新・今日の作家展2024　New “Artists Today” Exhibition 2024

I Found Myself in You

あなたの中のわたし

布施琳太郎
FUSE Rintaro

スクリプカリウ落合安奈
SCRIPCARIU-OCHIAI Ana

横浜市民ギャラリー
Yokohama Civic Art Gallery

ごあいさつ

「新・今日の作家展」の前身、「今日の作家展」は横浜市民ギャラリーが1964年に開館して以来、40年にわたり開催されました。同展は〈現代美術〉という言葉がまだ目新しかった頃より同時代の表現を多角的に紹介し、現代美術の一つの流れを示しました。その後幾度か名称を変え、横浜市民ギャラリーが現在の場所に移転した2014年からは「新・今日の作家展」として開催され、今年で10周年を迎えます。横浜市民ギャラリー開館60周年でもある今回は、「今日の作家展」から通底するテーマ、表現を通じての今という時代の考察のため、「あなたの中のわたし」を副題に二名の若手アーティストを紹介します。

〈わたし〉―自分が何者なのかという問いは、多くの方が一度は抱いたことがあるでしょう。数多の情報に触れられる現代においては、その問いを抱く機会が増加しているともいえます。一方で私たちは他者と不可分の存在であり、〈あなた〉―他者の存在に触れることが、翻って自らに対する気づきを導くことがあります。スクリプカリウ落合安奈は日本とルーマニア、二つの国にルーツを持ち「土地と人との結びつき」をテーマに、インスタレーション、写真、映像、絵画など様々なメディアで制作をしています。2022年12月よりおよそ一年間ルーマニアに滞在した経験をもとに、本展でも新作を交え再構成する、写真を中心とする作品《ひ かりの うつ わ》(2023年～)を複数の形式で展開しています。布施琳太郎はスマートフォン発売以降の都市における「孤独」や「二人であること」の回復に向けて、自ら手がけた詩やテクストを起点に、映像作品、ウェブサイトの制作、キュレーションやイベントの企画など、多様な手段を用いた活動をしています。今回はみなとみらい21地区の開発にヒントを得て新作を構想しました。本展で提示する〈わたし〉と〈あなた〉の関係性から展開する彼らの作品は、私たちのくらす時代や社会を表しています。鑑賞を通じて、それぞれ唯一無二である自己と他者、またその私たちが成す社会について思いめぐらす機会となれば幸いです。

2024年9月
横浜市民ギャラリー

謝辞

この展覧会を開催するにあたり、多大なご協力をいただきました次の個人、関係機関に深く感謝申し上げます。(敬称略)

スクリプカリウ落合安奈
布施琳太郎
落合由利子
木村絵理子
毛利嘉孝
窪田研二
クリストファー・スティヴンズ
田中信至
中村富美子
山峰潤也
株式会社大丸松坂屋百貨店
SNOW Contemporary
横浜美術館

あなたの中のわたし ―「新・今日の作家展」の現在地

齋藤里紗

1964年、10月の東京オリンピック開催に向け国中が高揚する雰囲気に溢れる中、横浜市民ギャラリーは4月に開館し、初回の「今日の作家展」が6月に開催された。自主企画展としては開館記念の「横浜総合美術展」に続く二つ目のものだった。1949～1963年、東京都美術館を会場に開催された読売アンデパンダン展(当初の名称は「日本アンデパンダン展」)は新聞社が主催し、名の通り誰もが出品可能の形式だったが、「今日の作家展」は公設の施設において、初期には美術批評家らが選定委員となり同時代の作家を選んだ点が特筆される。京都国立近代美術館では1963～1970年に「現代美術の動向」展(初回の名称は「現代絵画の動向」展)が開催され、同様に同時代の作家が多く紹介された。公設施設におけるこうした年次展覧会が定点観測的な場となり、とてつもないスピードで新たな表現が生まれ変化する様を示したこと自体が、70年代以降より存在感を増していく〈現代美術〉の枠組みの一端を形づくったともいえるだろう[1]。1964年当時横浜市長であった飛鳥田一雄(1915-1990)には「横浜現代美術館」を開設する構想があり、「今日の作家展」はその“前ぶれ”として位置づけられていた[2]。飛鳥田は戦後の連合国軍接収もあり復興が遅れた市内の整備のため、1965年に大規模な都市計画・横浜市六大事業[3]を打ち出すが、前年の市民ギャラリーの設置や「今日の作家展」の開催も、横浜市の新たな姿を構想する中で具現化したものであろう。飛鳥田の署名を付した「今日の作家68年展」の案内はがきのテキスト「あらためて美術の今日的状況に接して『現代とは何か?』問い返して見たいと思います」に「今日の作家展」開催の意義を再確認し、60周年となる本年も実施したい。

布施琳太郎は今回、上述した横浜市六大事業のうち、都市部強化の中核事業・みなとみらい21地区の開発にヒントを得た新作を構想した。六大事業は、都市計画家・建築家の浅田孝(1921-1990)が代表を務める環境開発センターが提出した「横浜市将来計画に関する基礎調査報告書」(1964年)に基づいて策定された。同事業によりみなとみらい21地区を開発するにあたって、浅田が横浜駅周辺と関内～現みなとみらい21地区の二つを核となる地域に据えたことが、布施が従来から試みてきた“「孤独」や「二人であること」の回復”にリンクし、マッチングアプリという現代的な事象と合成される。1994年生まれでデジタル・ネイティブ世代にあたる布施だが、中学生の頃に経験したスマートフォンの発売を機に変化した人々の対人関係や生きづらさに着目し様々な手法で活動をおこなってきた。マッチングアプリは、スマートフォン時代に入って以降広まったサービスであり[4]、インターネット上で他者と出会うことや関係を作り上げることが、手元のデバイスでより簡便にできるようになった。他者との接触を欲望する生々しさも有するアプリは、基本的にやりとりをする多数の個人のための閉鎖空間である。そうしたいわば内密な性質のマッチングアプリと、都市計画のスケールはかけ離れているように思えるが、都市はそこに暮らし行き交う人無くしてはその機能を全うできない。また都市では他者との接触を最小限にすることも可能だが、誰とも分かり合えない孤独は現在多くの人が抱える悩みである。そうした孤独や二人という単位を見直すことで、布施の制作は現在の社会やそこに暮らす私たちを照射する。詩作も活動の一つとし、制作の前段階でスケッチやドローイングの代わりに言葉を書くことでアイデアを練る布施は、今回どんな言葉で、人々や、人のいる都市を対照させ、再度結び、どのような形で示すのか。作品の意欲的な展開が期待される。

スクリプカリウ落合安奈は、ルーマニアと日本にルーツを持つことから幼い頃より経験した、他者からの無遠慮ともいえる問いに対する自らの戸惑いや葛藤を思考し、表現に昇華してきた。今回同時に展示するのが初め

てとなる二作《わたしの旅のはじまりは、あなたの旅のはじまり》（2021年）と《ひ か り の う つ わ》（2023／2024年）は、落合が自身の誕生に深く関わるもう一つの祖国、ルーマニアに向き合い、時間をかけて対峙した私的記録の側面も持つ。《わたしの旅のはじまりは、あなたの旅のはじまり》は、母で写真家の落合由利子氏が約30年にわたってルーマニアや欧州を訪れて撮影した三章にわたる写真、落合の写真シリーズ《Light Falls Home(s) - 家のひかり》（2021年）、それらを結ぶものとして、落合と由利子氏が写真作品のマケットを並べながら対話する手元を映した映像で構成される。ルーマニアを巡り、二人の対話、同地で生を受けた落合、出産した由利子氏の双方の視点から、30年の間に捉えた同地の姿に家族史が重ねられる。《ひ か り の う つ わ》は2022年からおよそ一年間、落合がルーマニア各地で過ごし、フィルムカメラで現地の人々や風景などを撮影した写真による。2023年に国立京都国際会館で初発表し、今回は新作となる秋の写真を加えて再構成する。落合が約一年の滞在期間で10,500枚もの写真を撮影したという事実には、その一日を一度しか過ごせないという切実な思いが如実に反映されている。コロナ禍で渡航ができなかったこともあって成し得た母との対話をベースとした《わたしの旅のはじまりは、あなたの旅のはじまり》と、自身の足と眼を使ってルーマニアの土地や人々、事物を実際に確認しつらまえた《ひ か り の う つ わ》。由利子氏と欧州、ルーマニアの人々、誕生し成長した落合と由利子氏の関係、落合自身とルーマニアとの対峙といった、まさに「わたしとあなた」の関係性の変化が、ルーマニアを中心に彼らの周囲を捉えた写真を軸に提示され、時間の経過の中で変遷するもの、変わらないものを印象深く刻み込む。

「あなたの中のわたし」をなぜ今回のテーマとしたのか。私たちは他者と完全に切り離されて社会に生きることができない。自分を取り巻く他者の存在やその行動が、自分という個の形成やその維持、あるいは変化に少なからず影響している。布施は、従来から探求してきた二人という最小単位の社会を都市の成立に投影し、マッチングアプリという現代ならではのツールの中で個人同士が出会う現象に、その背景や現代の孤独について思考を促す。落合は、自身が今ここにいることを探るため最も身近な家族との対話に発し、祖国で出会ったたくさんの他者との出会いに自分が過ごしたかもしれない日々を重ね合わせる。私というものを考えること、他者と触れることから逃れられず、一方で関係を希求すること、それらが影響し合うことはいつにあっても変わらない。その普遍性を内包する二人の作品は、「今日の作家展」が始まってから、そして〈現代美術〉が定着して以降の歴史を踏まえた今現在を象徴すると思われる。

飛鳥田のテキスト「美術の今日的状況に接して『現代とは何か？』問い返して見たい」を再び引く。美術の今日的状況は60年代以上に多様化を極めており、当時作家の多くが試みた美術の革新よりも、より広く社会や世界に眼を向ける作家が増えている。「現代とは何か」がわかるのは、実際には少し時間が経った後かもしれない。それでも今という時代を知ろうとし次代に課題を投げかけ続けるのが作家であるし、他者である作家－〈あなた〉の表現の今日性に触れることが、同時代を生きる〈わたし〉たちに新たな視点をもたらすのではないだろうか。

（横浜市民ギャラリー学芸員）

●1 「『現代美術』という言い方について（中略）1970年代から、それまでの「前衛美術」という言い方に取って代わって用いられるようになってきた」（小倉正史「『今日の作家』展の25年」、『横浜市民ギャラリー開設25周年記念　今日の作家展1964-1989』、横浜市教育委員会［横浜市民ギャラリー］、1990年）
●2 片多祐子「1960年代の横浜における美術館構想―横浜美術館コレクション展『ヨコハマ・ポリフォニー：1910年代から60年代の横浜と美術』補論」、『横浜美術館研究紀要第23号』（横浜美術館、2022年）
●3 （1）都心部強化事業、（2）金沢地先埋立事業、（3）港北ニュータウン建設事業、（4）高速鉄道（地下鉄）建設事業、（5）高速道路網建設事業、（6）ベイブリッジ建設事業
●4 2012年、Tinderの公開が同市場の拡大を促した。

スクリプカリウ落合安奈

巡っていく。
季節も、時代も、祈りも、
よろこびもかなしみも、いのちも。

2021年の夏、パンデミックによってもう一つの母国・ルーマニアに入れない状況が続いていた。そんな中、自身が生を受けたきっかけとなった、写真家である母親の1989年のベルリンの壁崩壊、ルーマニア革命をめぐる旅路を紐解く。
この年、母が私を産んだ年齢になった。
作家同士であるが故にできなかった対話を、母娘は作品を通じて試み、二つの旅路が重なってゆく。

2022年の冬、パンデミックによる世界的な混乱が落ち着きを見せ始めると同時に、ルーマニアの隣国ウクライナでは終わりが見えない戦禍が続いていた。そんな中、もう一つの母国で生きる初めての、そしてもしかしたら最後の季節の一巡りの旅が始まった。
そこで待っていたのは、この土地で生きてゆくための術を与えてくれた親のような人々との出会いや、日常の中の鮮やかな生と死、そして「今はわからなくても、見ていればわかる、行ってみればわかる」という、情報ではなくて感覚を使って世界に直に触れるシンプルな生き方だった。

本展は、作家／人生としての第1章の節目となる作品と、第2章のはじまりの二作品を同時に見せる初めての機会となる。それぞれは独立しながらも深く関係し合う。

わたしの旅のはじまりは、あなたの旅のはじまり。
様々な旋回の軌跡が、静かに重なり合う。

スクリプカリウ落合安奈 collaborate with 落合由利子《わたしの旅のはじまりは、あなたの旅のはじまり》2021年 ミクストメディアインスタレーション Photo by Keizo Kioku

スクリプカリウ落合安奈《ひ か り の う つ わ》2023年

スクリプカリウ落合安奈インタビュー

※出品作品《わたしの旅のはじまりは、あなたの旅のはじまり》について、コラボレーターである落合由利子氏にもインタビューを行いました。

落合由利子　1963年生まれ、写真家。展覧会多数。写真集に『WINDOW'S WHISPER』(1984年、私家版)、『話したい 戦争は知らないけれど』(2021年、私家版)。著書に『絹ばあちゃんと90年の旅〜幻の旧満州に生きて』(2005年、講談社)他　https://ochiaiyuriko.com

《わたしの旅のはじまりは、あなたの旅のはじまり》

制作の経緯

安奈｜ 2021年にANB Tokyoさんから個展のオファーをいただいたことが制作のきっかけです。私は「土地と人の結びつき」というテーマで制作活動や研究をしており、二つの母国に根を下ろす方法を探っていましたが、前年からの新型コロナウイルスのパンデミックでもう一つの母国・ルーマニアに行けない状況でした。ですので、行くことができない母国へのアプローチを考えることから作品の構想を始めたところ、自分が生まれたきっかけというものが避けて通れなくなりました。母であり写真家の落合由利子がルーマニアを旅したことで私が生を受けたのですが、その旅路は表現者としての彼女にとっても重要なもので、表現者となった娘の私がそこに踏み込むことが難しくなっていました。しかしある時、彼女の作品と私の作品が対話するような形で、二人で展覧会を作ることができるのではないかと閃きました。そしてそれは、私たち家族のものだけでなく、様々な人々に開かれたものになるだろうと予感しました。

由利子｜ 安奈さんが神妙な面持ちで「お話があります」と言うので、何が来るかなと思ったら「一緒に展覧会がしたい」という申し出でした。驚きましたが、やるしかないなと思いました。

落合由利子氏の写真

由利子｜ 私が最初に東ヨーロッパに入ったのは、1989年のベルリンの壁崩壊直後です。当時、私は日本でテレビの映像を見ていました。老若男女が抱き合って泣きながら笑い、歌を歌い、そして壁を叩き割っている。感動するのですが、チャンネルを変えると違う番組を見て笑っている。その違和感に我慢できなくなりました。この人たちは一体何を食べ、話し、どんなことで笑うのだろう。今、確かにそこに生きている一人ひとりの人間に会って写真を撮りたい、そしてその手に触れてみたいと思いました。展示では、私は自分のパートを三章に分けました。第一章は、1989年に現地に行き人々を撮影したもの。ドイツから東ヨーロッパに入りました。第二章は、1992年にルーマニアを再訪したときの写真です。そのときは、どこか別の国に暮らしてその土地の言葉を話し、その土地の物を食べ、生活しながら作品を撮りたい、それをしなくては自分が駄目になってしまうという強い思いがあって、前回の旅の中ですごく土の匂いがしたルーマニアに向かい、ほぼ自給自足の村に二カ月近く滞在しました。ここに何を求めて、何をしに来たのか自問自答しながら、写真を撮ることでそれを探る日々。その旅をきっかけに私は子どもを産むことになります。何年かあと、そのとき撮ったフィルムに日本の暗室の中で対面しながら、自分は命を育む社会や、命に当たる光に反応してシャッターを切り続けていたんだなと認識しました。最後の章は、1992年から2014年の写真です。出産後、子どもと一緒に4回ルーマニアを訪れた際のものです。最後の一回は、20代になった安奈さんから、ルーマニアに行かないと自分はこれ以上表現ができないので一緒に行ってほしいと訴えを受けての、14年間ぶりの再訪でした。そのとき撮影したものはしばらく現像せずにいたのですが、このテーマを作品にするならばそれらが必要だと思いました。写真に向き合う過程で、一枚が非常に強く飛び込んできました。それは本棚に飾られている古い写真を撮ったもので、出産したばかりの若い義母が赤ちゃんと共に笑っている。この写真が、ルーマニアの地で小さい子どもを抱えて右往左往していた時の自分と、そして今の安奈さんと重なりました。思いが巡るような体験でした。

映像作品

安奈｜《わたしの旅のはじまりは、あなたの旅のはじまり》は、展覧会内展覧会のような形になっています。この展覧会内展覧会がユニークであると思われる点として、ただの親子の二人展ではないことが重要だと思っています。大きな枠組みとして私がキュレーション、もしくは監督のような立場で全体を構成しており、三つの要素があります。一つは由利子さんが1989年以降渡欧し撮影した写真。二つ目は私が成人してからルーマニアで撮影してきた写真と、その際に持ち帰ったルーマニアのかけらたちを、パンデミック下の日本の自宅に降り注ぐ光で撮影した写真を組み合わせた二点一組×9点の作品《Light Falls Home(s)-家のひかり》。最後に、私と由利子さんが展覧会のマケットを挟んで対話するような手元を映した、私の映像作品です。二人の作品を結ぶような形としてこの映像作品があるのですが、その中で更に二人の作家－写真家と美術家、同時に親子で母と娘というある意味役割を持った二人が作品で対話をしているという構成になっています。とてもウェットでプライベートな家族史を扱うので、それをそのまま出すのではなく、いかにドライに仕上げるか葛藤しながら形を探りました。

光／ひかり

安奈｜ 私はルーマニア以外にも様々な国を旅して、それぞれの土地で目にする光の違いを実感しました。地球は球体で、太陽から受ける光の差は国と国との距離を表すものでもあり、一方で、人間が引いた国境線に関係なく平等に降り注いでいるとも思いました。二つのことを重要に感じ《Light Falls Home(s)-家のひかり》を制作しました。写真に光はなくてはならない存在で、かつ当たり前にあるものですが、作品の中ではモチーフ、重要なものとして扱っています。

今回の展示構成

安奈｜ 今回で《わたしの旅のはじまりは、あなたの旅のはじまり》は三度目の出品になります。昨年秋に東京で展示したときは、同時期に京都で一年間のルーマニア滞在の成果である《ひかりのうつわ》を発表したのですが、この二つを同時に見せることでまた新たな意味が立ち上がり、母から私に受け継がれている長い時間の層を見せることもできると思います。1989年の閉じられていた世界が開かれていく、みんなが希望を抱いただろう時代から、パンデミックで様々な境界線、国境が閉じられていく時代。私がルーマニアに向かおうとしたときにはその隣国ウクライナでロシアによる侵攻が起き、滞在中にはパレスチナへのイスラエルの侵攻も始まりました。二つの作品を通じて、歴史と個人とがつながっていることや、過去、現在、未来の様々な捉え方に気づくきかっけとなればと思います。

痛み、表現、感触

安奈｜ 小学校に上がった頃から、ミックスルーツのためにマイクロアグレッション的な経験が増えたのですが、その苦しみを同じ背景を持たない人々と言語で共有し共感し合うことが難しく、言葉をあまり信じられなくなりました。でも絵を描いたりものを作ったりすることは人々に認めてもらえる、他者とつながれるという感じがありました。私の人生における課題であり、なかなか簡単に越えられないものは、人間の差別の仕組みや、コミュニティの中で起こる異なるものを排除するという現象です。こうした現象は人間社会でこんなにも問題視されているのに、なぜ解決しないのだろうというところに関心が向かい、そこで自分の人生だけでなく、次世代のために社会をより生きやすいものにしたいという思いと、ヴィジュアル・ランゲージとしてのアートとが結びついていきました。

《ひかりのうつわ》

ルーマニアでの一年

安奈｜ 日本にいると、外見上どうしてもルーツに関して質問を受けます。でも私はルーマニアについて答えることができなかった。自分の一部として他者から求められるルーマニア人の部分が、身体の中で透明な臓器のようにどんどん肥大化して苦しく、その透明な臓器に血を通わせて色を付けたいという欲求が高まっていました。成人してからのルーマニア滞在は最大で二カ月未満で、それぞれ異なる季節でした。この先の人生でいくら多くの季節を同国で過ごして継ぎ接ぎしても、自分が求める手触りは手に入らない。もっと深く潜っていくために季節の一巡りをルーマニアで過ごしたいと思ったところコロナ禍となり、2022年の12月にようやく日本を出国しました。そこで得られた一番貴重なものは、たくさんの「父、母」たちとの出会いです。私は現地の暦に沿って年中行事や季節の風習などの伝統を追い、フィルムカメラで撮影をしました。そのとき私はこの土地でその一日を一回しか生きられない。一日はそれぞれ特別な意味を持ちます。だから、一発勝負のようにルーマニア各地を訪れていました。あちらでは時間も約束も予定通りに進まないことが当たり前です。事前に何か尋ねても「とりあえず行ってみなさい」と言われるので、行きます。次の一瞬に対して、頭ではなく生き物として反応して考え生きることが必要な世界でした。大変でしたが、そういう生き方、ルーマニアという土地に生きる術を色々な人から与えてもらったと感じています。

撮った写真を見返すと、私はこの土地に生きる無数の命の手触りを感じたかったのだなと思います。言葉にすると、由利子さんのときと重なります。私が前回訪れたルーマニアは現代化が進み、土着の、土地に根付いた伝統はすごいスピードで消えつつあるところでした。ですが、地を這うようにあの国で一年生きたことで、たくさんの命が新しく生まれる場面に立ち会い、色々な死にも向き合いました。心の震えにたくさん触れさせてもらい、おそらくルーマニアにいる人々に受け入れてもらうことができた。大事な経験でした。

フィルムカメラでの撮影

安奈｜ フィルム写真にこだわった理由は、やはり物質感を大事にしたかったことと、身体性です。不便で繊細ですが、一回きりの季節の一巡りを捉えるにはこれしかないと。フィルムカメラを使うことで、物質性やその土地の空気を持ち帰ることができ、作品を見た人をそこへ連れていくことができるようになったように思います。今は帰国してから半年くらいですが、どんどんルーマニアが遠ざかっていき、すごい時間をかけて手に入れたものが、指の間から砂のように零れ落ちていくような感覚が日々あります。そんなとき、自分が撮ってきたフィルム写真を見ると、いつでも自分自身もそこに飛ぶことができる。表現者をやっていて、また写真というメディアを今回選んだことの幸運だなと感じています。

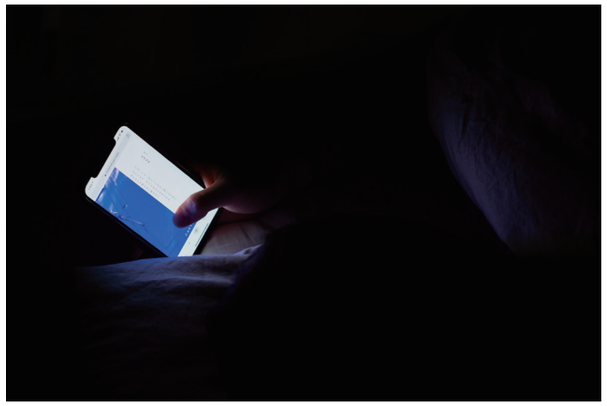
あなたの中のわたし

安奈｜ シンプルですが、鏡合わせでどんどん奥に続いていくようなイメージを受けました。そして私の作品タイトルの《わたしの旅のはじまりは、あなたの旅のはじまり》を想起しました。“わたし”と“あなた”には自分自身も入るし、同時に色々な人が立場を変えて入っていける、そういう余白と包容力、またその循環のようなものを感じます。《ひかりのうつわ》では、自分が生きたかもしれないルーマニアでの30年を一年間で取り戻すという思いもあり、“わたし”と“あなた”に、私ともう一人の私みたいなものも入るように感じました。この何年か、遠い他者をいかに自分に引き寄せて考えられるかということを考えてきました。他者の痛みを想像しても、それは私の想像の中のものでしかない。でも、わかりたいと思って引き寄せ続ける態度や、想像し続けること、その方法を考え続けること自体に意味があるのではないでしょうか。

2024年6月21日　横浜市民ギャラリーにて　聞き手・編集：齋藤里紗

布施琳太郎

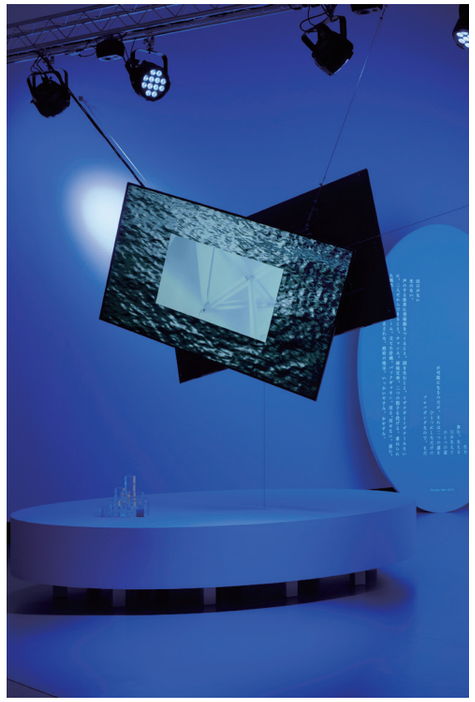
これまで私は、詩や批評、プログラムなどの「言語表現」をベースとした映像や絵画、インスタレーション、展覧会、ウェブページなどをつくってきた。一貫して「新しい孤独」や「二人であること」を、コンピュータと人の接触、人と人のコミュニケーションから探求し、表現している。今回の展覧会では横浜の都市開発を主導した浅田孝（1921–1990）の開発思想の調査と再構成に基づいた「架空のマッチングアプリ」を構想しながら、そこでなされる仮想の恋愛や性愛について、展示室全体を用いて表現する。浅田の思想を端的にまとめれば「楕円形」（正円とは異なり二つの焦点がある）であり、それは横浜駅周辺とみなとみらい地域の二点に見出すことができる。「一」や「多」ではなく「二」に注目したことはユニークな考え方で興味深い。またマッチングアプリの利用者はコロナ禍を経て急増しており、学校や職場での関係性が「学びのため」「仕事のため」だけのものになってしまった社会において需要が無視できないものだ。



布施琳太郎《隔離式濃厚接触室》 2020年 ウェブページ　撮影:竹久直樹

布施琳太郎『涙のカタログ』
（2023年、PARCO出版）

布施琳太郎『ラブレターの書き方』
（2023年、晶文社）



布施琳太郎《骰子美術館計画》2024年
ビデオインスタレーション　撮影:竹久直樹

布施琳太郎インタビュー

スマートフォン発売以降の都市における「新しい孤独」や「二人であること」の回復について

作家活動を始めたころからコンセプトとして「新しい孤独」と言っていて、そこから派生した『ラブレターの書き方』（2023年、晶文社）を書く中で「二人」にも向き合うようになりました。近年の現代美術やSNSにおける人々の言説や投稿は、本来かけ離れているはずの〈私〉と〈社会〉をどれだけ滑らかにつなげて語ることができるかが重視されがちです。その語りが上手い人はSNSで大きな注目を集められるし、現代美術としても精度が高い論点、表現を提示できているとされることが多い。だけど「私がいます」とか、「独りで遠くを見ています」、「誰かと二人きりでいます」という状況は、そうした言説や表現を通じてなくなっていってしまうのではないか。そんな危機感から、色々な方法で作家活動をしています。バイオグラフィーに「都市における」と書いたのは、都市のことしか自分が責任を持てないので付け加えている言葉です。東京も日本も、地球規模、歴史全体から見ると都市といえる。もちろん旅人として赴くとか、本を読んで垣間見ることもできるかもしれないけれど、やっぱり都市ではない場所についてリアルには考えられない。それに表現を始めた頃に知り合った人たちは、今の僕より10歳くらい若く、当時の社会状況や環境の中ではどうしても解消できない生きづらさや、報われない困難にぶつかりながらも、それにもがく術すら持たされてないような感覚を持っていたと思います。そんな人たちの生の感覚を肯定するようなことができたらというのが、まずありました。

詩やテクストを起点にすること

自己紹介をするときに「現代美術」と言うより、詩を書いていて、その詩を映像にしたり展覧会にしたりしていると伝えると、様々な人との会話が始まるきっかけになります。それに人が詩やテクストを書くことは、誰にも止められません。展覧会を開くにはまず場所が必要で、映像の上映にも機材を持ってこないといけない。でも詩を書くことは、自分が社会的に追い詰められたとしても、あるいは社会の側が今みたいな政治的な自由度を失っても、ずっと死ぬまで続けられそうだなと。自分の自由のために書いているところもあります。

書くこと、話すこと

アイデアを出すとき、文字や声などの言葉をベースにします。スケッチやドローイングみたいなものだと思います。だけど最初は、文章にすると意味が確定してしまって、居心地がよくありませんでした。そこで途中まで書いて改行して次にいくことを繰り返してみたら、途中まで考えたことを残しておけて、これが詩になっていきました。詩はそういうふうに途中が途中であることをとっておけるのですが、喋るときは常に先に進めなくてはいけない。一方で会話は、こちらが考えてもいない方向づけを相手がしてくれたりします。独りきりでは不可能な方法で、アイデアが形になる時間が好きです。今年発表した《骰子美術館計画》（2024年、国立西洋美術館）では、制作の途中段階で建築家の人などに何度か話し相手になっていただき、相手の喋り方やボキャブラリーを自分の身体に染み込ませながらアイデアを固めていきました。今こうしてインタビューしていただいていることも、ピュアに言葉を口にすることでアイデアを形にする機会だと思っています。

今回の出品作品

先日「架空のマッチングアプリ」という言葉をふと思いつきました。通っていた大学院の校舎があったみなとみらい21地区は、都市プランナーの浅田孝さんという方が開発しました。都市開発とは、人がたくさんいる空間が50年後、100年後まで滞りなく回るシステムを作ることですが、みなとみらい21地区は、現に40年ほど経ってもうまく回っている。浅田さんが構想した社会、コミュニティ、人の持続的なやり取りを活性化し続けるシステムという都市開発の観点から、「架空のマッチングアプリ」を作って、そこで起きるコミュニケーション自体を一つの空間として体験してもらいたいと思っています。みなとみらいはビジネス的な面もあるけど、デートコースとして使われる場所でもありますし。開発前はどういう場所だったのか。黒澤明の「天国と地獄」（1963年）では横浜の黄金町が出てきましたが、そこにあった恋愛や性愛のあり方は、現在の横浜、みなとみらいとはかけ離れたものです。今回の作品は、そうした歴史的な背景も踏まえて、未だ僕たちが出会ったことがない、考えたことがないような恋愛や性愛の状態を考えるための梯子になるかもしれないと思っています。

あなたの中のわたし

もし「あなた」と「わたし」が逆だったら、すごく暴力的なフレーズだなと思います。よくあることです。「わたしの中のあなた」のイメージをどんどん捏造して、期待して、でも私の中のあなたとそこにいるあなたが違うことに対して憤ったり悲しんだりする。身勝手ですよね。今回は「あなたの中のわたし」なので、もう少し優しい気遣いになるのかなと思います。例えば婚姻制度は、家制度の延長にあり、戸籍という国民管理のメカニズムの中で「わたし」と「あなた」を扱っている。それに対して二人が共にいることが、第三者に認められるからこそ守られる権利、作られる尊厳もあります。パートナーシップや同性婚についての運動は、国家という権力機制の中で、人間にとっての権利や尊厳を問い直すから重要です。また、婚姻に伴って苗字を一緒にするという決まりへの疑いの声もあります。夫婦同姓は国家の維持管理の手法なので、個々人の権利の問い直しでは政治はなかなか動いてくれないですが、私たちは家や戸籍によってだけ規定され、尊厳を得ているわけではありません。もっと違う方法で二人が共にいること、私とあなたがいること、それを認める第三者性を考えたい。

50年ほど前、浅田孝さんが横浜の再開発に取りかかった頃は、横浜駅周辺が都市として発達していた一方、現在のみなとみらい地区の場所には工場がたくさんあったそうです。そこで、その工場群を金沢区の方に移動させて、まず横浜駅とみなとみらい21地区という二つの焦点を作った。そして、港北ニュータウンを中心にベッドタウンを設けて、三つの地点で三角形を作ったんです。一つの中心から周りにものを並べていくのではなく、まず二つの軸を作り、それらの軸をうまく回すために、道を作ったり、第三軸を設けたり、その中に様々な対立構造を重ねながら作っていく。そうすると、何かがうまくいかなくなっても都市を丸ごと改善するのではなく、部分的に対処できるだろうというのが、浅田さんが考え横浜で実験したことです。大事なのは中心が二つあること。それがサステナビリティにつながっている。これを人間の二者関係にそのまま還元させるわけではないのですが、浅田さんが行ったことを踏まえながら、私とあなたのサステナビリティをどう作れるのだろうという発想が、マッチングアプリという言葉につながっています。「こんなに愛し合っているのだから結婚しよう」みたいな考え方ではなくて「こんなに愛し合っていると結婚するらしいけど、そうすると私たちは幸せになるんだろうか？」と二人で考えたりすること。結婚とか、国家とか、ごく当たり前のことを問い直すための拠点として二人という単位を活用したいのです。展示作は、こういうことを少しバーチャルに、SF的に考えるようなものになるでしょう。恋愛だと成就と失恋がありますが、都市における失恋とは何か。魅力的なフレーズが作れそうです。

二冊の著作について

自分のものの考え方も二つのスタイルがあります。詩集『涙のカタログ』（2023年、PARCO出版）は、はじめ作品集として立ち上がったのですが、写真が一枚もない作品集にしたいと思って、作品制作の手前にある言葉などを集めて、詩集にしました。『ラブレターの書き方』は反対に、自主企画で行っていた人前で喋る連続レクチャーを企画書にして出版社に持ち込み、本にしていただきました。この二冊には、私にとっての言葉の二極、詩と喋ることの特徴が出ていると思います。

伝えること、伝わり方

僕は展覧会や作品を色々な人に見てもらうわけですが、SNSなどで感想を投稿されるよりも、口コミの方を信頼しています。「良かった」「悪かった」というのを目の前にいる人に伝えるとき、言葉を選んだり言い直したり、言い淀んだりします。僕自身も、誰かから何かを見て思ったことを真摯に伝えられると、やっぱり気になって見に行ったりする。自分の見たものを口コミで伝えるというのは、受け手からの文化的で革命的な活動だと思います。そういうことを、僕の作品に限らずみなさんにどんどんしていただきたいし、自分も誰かに喋りたくなるようなものを作れたらと思っています。

2024年6月24日　SNOW Contemporaryにて（個展「性と大地」会場）

聞き手・編集：齋藤里紗

スクリプカリウ落合安奈　SCRIPCARIU-OCHIAI Ana

1992年埼玉県生まれ。2016年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業（首席・学部総代）。2019年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程グローバルアートプラクティス専攻修了。現在東京藝術大学大学院博士後期課程在籍。2022〜2024年公益財団法人ポーラ美術振興財団令和4年度在外研修（ルーマニア）。主な展覧会に、埼玉県立近代美術館コレクション展「MOMASノ海」（埼玉県立近代美術館、2023年）、「Art Collaboration Kyoto Special Programs “Ladder Project”」（国立京都国際会館、2023年）、「TERRADA ART AWARD 2021 ファイナリスト展」（鷺田めるろ賞受賞、寺田倉庫／東京、2021年）、個展「Blessing beyond the borders －越境する祝福－」（埼玉県立近代美術館、2020年）「Y.A.C. RESULTS 2020」（ルーマニア国立現代美術館、2020年）など。
https://www.ana-s-ochiai.com/

©Kotetsu Nakazato

布施琳太郎　FUSE Rintaro

1994年生まれ。東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業、2019年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。スマートフォン発売以降の都市における「孤独」や「二人であること」の回復に向けて、自ら手がけた詩やテクストを起点に映像作品やウェブサイト、展覧会のキュレーション、書籍の出版、イベント企画などを行っている。主な活動に個展「新しい死体」（PARCO MUSEUM TOKYO、2022年）、廃印刷工場でのキュレーション展「惑星ザムザ」（小高製本工業跡地／東京、2022年）、ひとりずつしかアクセスできないウェブページを会場としたオンライン展覧会「隔離式濃厚接触室」（2020年）など。主な参加展覧会に「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？」（国立西洋美術館／東京、2024年）、「時を超えるイヴ・クラインの想像力」（金沢21世紀美術館、2022年）など。著書に『ラブレターの書き方』（2023年、晶文社）、詩集『涙のカタログ』（2023年、PARCO出版）。
https://rintarofuse.com/

写真＝岡崎果歩

新・今日の作家展2024　あなたの中のわたし

2024年9月14日［土］–10月7日［月］
10:00–18:00（入場は17:30まで）
横浜市民ギャラリー　展示室1、B1
入場無料
主催｜横浜市民ギャラリー（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／西田装美株式会社 共同事業体）
協力｜SNOW Contemporary

関連イベント

出品作家ミニトーク

スクリプカリウ落合安奈×布施琳太郎
9月14日［土］15:00–15:40　会場｜4階アトリエ

対談「横浜の開発：展示作品について」

布施琳太郎×木村絵理子（弘前れんが倉庫美術館館長）
10月5日［土］14:00–15:30　会場｜4階アトリエ

対談「越境するひかり—移動する身体、文化の継承」

スクリプカリウ落合安奈×毛利嘉孝（社会学者、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授）
10月6日［日］14:00–15:30　会場｜4階アトリエ

学芸員によるギャラリートーク

9月21日［土］14:00–14:30　会場｜展示室1、B1

担当学芸員｜齋藤里紗、河上祐子、伊藤ちひろ
デザイン｜川村格夫
印刷｜株式会社エイコープリント
翻訳（別紙）｜平野真弓
インタビュー映像｜播本和宜

編集・発行｜横浜市民ギャラリー（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／西田装美株式会社 共同事業体）
〒220-0031 横浜市西区宮崎町26番地1
TEL 045-315-2828　FAX 045-315-3033
https://ycag.yafjp.org/

© Yokohama Civic Art Gallery 2024